

海外の大学キャンパスにおけるセラピードッグ導入の現状 —— これからの可能性 ——

卜部 洋子¹

要 旨

セラピードッグという言葉はすでにわが国に定着した感があり、近年では、いくつかの団体が、大学キャンパスへ訓練済みのペットを伴って訪れ、学生や教職員に動物とのふれあいを提供する機会が見られるようになった。本学も2017年からセラピードッグとのふれ合い企画を定期的に行っている。しかしながら、日本と比べて、海外の大学キャンパスではセラピードッグを積極的に活用していることが多く、学生のストレス軽減を狙って、試験前などキャンパス内にセラピードッグを導入するところも増えている。更に、海外の大学の図書館やカウンセリングルームにセラピードッグが在駐していることもあり、学生はセラピードッグに触れて、一緒に同じ空間で過ごすことで、不安や緊張した気持ちを和らげ、心の安らぎや意欲を高める等様々な効果が発表されている。本稿は、海外の大学キャンパスでのセラピードッグ普及活動や研究について紹介し、これからの国内の大学キャンパスにおけるセラピードッグ導入と可能性について考察したい。

キーワード：セラピードッグ，学生，メンタルヘルス

1. はじめに

現代は、さまざまなストレスが溢れている。そのストレスを軽減する方法の一つとして、犬と触れ合う『セラピードッグ』があり、世界各国ではセラピードッグが治療や療法の一種として認識されつつある。海外の大学では、学生のストレス軽減を狙って、試験前など大学キャンパス内にセラピードッグを導入するところが増えている。

最初に、セラピードッグの果たす役割と効果について述べたい。セラピードッグはアニマルセラピーに属し、特定非営利活動法人動物介在教育・療法学会（以下 ASAET、英語名：Asian Society for Animal-assisted Education and Therapy (ASAET)）によれば、動物を介在させる活動が人間の心身の健康や教育に果たす役割としている。ASAET が考える動物介在教育 (Animal assisted education：以下、AAE) および動物介在療法 (Animal assisted therapy：以下、AAT) と

は、ある目的のために動物を介在させて人が人に介入する活動のうち、教育を目的に教員が、あるいはその指導のもとで行う活動を AAE、人の生活の質の向上を目指して心身の不都合の改善、あるいは人の治療の専門家（公認心理師、医師または作業療法士など）、あるいはその指導のもとで行い評価を伴う活動を AAT と呼んでいる (ASAET；動物介在教育・療法学会ウェブサイト)。

人と動物の関係に関する国際組織、International Association of Human-Animal Interaction Organizations (以下、IAHAIO) では、人と動物との相互作用の正しい理解を促進させるために各国で活動している学会、協会等の国際的な連合体として、米国の Delta Society (現在は Pet Partners)、フランスの afirac、イギリスの SCAS が中心となって1992年に設立された。IAHAIO は、国際レベルで動物介在介入 (AAI) に関する用語や定義の統一が必要なため発足された。IAHAIO の IAHAIO 白書には、AAI における人と動物の福祉のためのガイドラインが記載され、「人の福祉」と「動物の福祉」について説明されている。「人の

¹ 札幌学院大学 学生相談室：
urabe@ims.sgu.ac.jp.

福祉」について、以下の4点をあげている。(a) クライアントの安全対策がなければならない。(b) 専門家はAAIに関わっているクライアントのリスクを軽減しなければならない。(c) クライアントに動物や品種のアレルギーがないことを確認し、人によってはリスクが高いことやリスクの種類(例:免疫抑制された患者の感染、動物を通じて人から人に感染する疾患等)による除外の基準の認識を持っていないといけない。(d) 免疫抑制された患者と行う場合等、状況によっては、動物が特定の感染症を保持していないかどうかの確認が必要であることを説明している。一方、「動物の福祉」については、動物の健康状態が良好で、動物も活動を楽しむことができることを必要としている。セラピードッグを調教する専門家(以下、ハンドラー)は、動物の特徴について以下の3点について義務付けられている。(a) ハンドラーと一緒に活動をしている動物の福祉に責任がある。(b) あらゆるAAIの活動をする際にハンドラーは、参加者全員の安全と福祉を考慮しなければならない。(c) AAIの活動する動物は、単なる道具ではなく生き物であることを、ハンドラーは理解しなければならないと説明している(IAHAIO 白書, 2014)。

セラピードッグとは、動物を使った治療方法の一種で、高度に訓練されたセラピードッグとの触れ合いや交流を通じて癒しを得るだけでなく、精神的情緒的安定や、身体運動機能回復効果も期待できることが示された(Patricia & Jaymie, 2019)。また、動物が人にもたらす効果と影響について、Levinson (1962)によれば、(1) 心理的効果、(2) 生理的・身体的効果、(3) 社会的効果の3つをあげている。生理的効果としては、(a) 病気の回復・適応・闘病のサポート・促進、(b) 血圧やコレステロール値の低下、(c) 神経筋肉組織のリハビリなどが挙げられる。心理的効果としては、(a) 意欲増進、(b) リラックス、(c) 自尊心、責任感、有用感・優越感・達成感の向上、(d) 余暇(遊び)の提供、(e) カタルシス作用、(f) 教育的効果、(g) 注意力の向上、反応時間の短縮、(h) 共感などがある。社会的効果としては、(a) 社会的相互作用、社会的潤滑油、(b) 言語活性化作用、(c) 集団凝集性の向上といった効果があることを示した(八城, 2020)。

2. 海外の大学キャンパスにおけるセラピードッグの活動と普及

海外では学生たちのストレス緩和を目的に、大学内にセラピードッグを導入したところが増えている。海外の大学のセラピードッグ導入の企画について紹介したい。

大学キャンパスでセラピードッグが初めて導入されたのはアメリカのコンコルディア大学だった。2014年に、常勤としてゴールデン・レトリーバーのセラピードッグ「ゾーイ(Zoey)」を採用し、学生や教職員に喜ばれていた(Concordia University Wisconsin, 2019)。

次に、(1) イェール大学の図書館で働くセラピードッグ、(2) バージニア工科大学の図書館と地域で活躍したセラピードッグ、(3) 大学キャンパスに、Emotional Support Animals (ESA) を同伴することができる、以上の海外の大学におけるセラピードッグの活動と普及について説明する。

(1) イェール大学の図書館で働くセラピードッグ

イェール大学をはじめとするいくつかの大学が、学生向けのセラピードッグプログラムを制定した。イェール大学の図書館(Yale University-Beinecke Rare Book & Manuscript Library)にはセラピードッグが働いており、短い睡眠時間の中、プレッシャーに押しつぶされそうになりながら勉強する学生の精神的な支えになっている。また、大学入学をきっかけに多くの大学生は、実家から離れて一人暮らししたり、実家で一緒に過ごしたペットと離れること等で、寂しさや不安感からホームシックに悩む学生も少なくない。そのなか、セラピードッグと触れ合うことで、大学生の血圧が下がり、不安が軽減され、学生から「うつ病が落ち着いた」ことも報告された(USA TODAY, 2014)。

(2) バージニア工科大学の図書館と地域で活躍したセラピードッグ

バージニア工科大学(Virginia Tech)の動物介在療法のカウンセラー兼コーディネーターのTrent Davisは、2013年に、「ムース」という名前のセラピードッグを採用した。そのセラピードッグは、カウンセリングセンターに所属し、大学と地域のコミュニティに奉仕する仕事に就いた。セラピードッグの「ムース」は、7年間で、7,500以上のカウンセリングセッションと500以上の地域のイベントを支援した。Trent Davisによれば「彼は私にとって一生に一度の犬でした。私たちは素晴らしい絆で結ばれていました。それは私た



図 1. Service Animal Policy (AIRPORT ANIMAL POLICY を参考に筆者が作成)

ちの関係と仕事を繋げてくれました。私たちスタッフに対する彼の偉大な教訓の中には、偏見を持たず、じっくりと落ち着き、すべての人へ無条件の愛を与えています」と述べた。セラピードッグの「ムース」の貢献により、現在、バージニア工科大学のカウンセリングセンターに、3頭のセラピードッグが配置された (Virginia Tech, 2019)。

(3) 大学キャンパスに同伴可能な Emotional Support Animals (ESA)

図 1 は、Service Dogs, Emotional Support Dogs, Therapy Dogs, に関する役割の表示である。Service Dogs とは、補助犬で、アメリカ人障害者法 (ADA) で適用されている。Therapy Dogs は、はじめにも述べた通り AAT と AAE にあてはまる。Emotional Support Animals (以下、ESA) については以下の通りである。

ESA とは、感情支援動物と呼ばれ、飼い主に感情的・身体的健康に貢献し、社会生活を向上させ、自信を持たせ、リラックスさせる役割を担っている。ESA は犬が多く、ESA と一緒に居ることで、うつ病や不安障害、PTSD などの精神障害を抱える患者は、落ち着きと安心感を得ることができるとしている。ESA は元々ペットとして犬が飼われていることが多い。そのペットを ESA として認める判断基準は、患者が精神科医を受診し、カウンセリングを受ける必要がある。精神科医が患者にとって、ESA を必要と判断した際に、書類を作成し、アメリカ政府に申請する (HEMHA, 2023)。これらから、動物自体が資格を有する盲導犬や介助犬などとは違って、ESA は資格を持っている

のは人間である。

アメリカの大学では、ESA を必要とする学生も多く、大学キャンパスに ESA を同伴することを承認していることも多い。ESA を大学キャンパスに同伴を希望する学生は、ESA の種類、大きさ、ESA の世話ができること、ESA を大学に持ち込んだ場合に問題がないか等、学生にとって ESA がどれだけ精神的な支えになっているかなど、看護師、コーディネーター、カウンセラー等からのアセスメントをしてから対応している (HEMHA, 2023)。

セラピードッグを導入している海外の大学とセラピードッグのふれ合い企画の内容を表 1 にまとめた。

3. 海外の大学キャンパスにおけるセラピードッグの研究と効果

セラピードッグとのふれ合いにより、ストレスを抱えた学生が緩和され、学習効果や試験への動機づけ等、ワシントン州立大学の研究をはじめ、以下の 3 点の研究論文について紹介したい。

(1) Petting Therapy Dogs Boosts Stressed Students' Thinking Skills (セラピー犬とのふれあいがストレスを抱えた学生の思考力を高める)

ワシントン州立大学 (Washington State University) の新たな研究によると、セラピードッグとのふれあいに焦点を当てたプログラムは、従来のストレス対処プログラムよりも、ストレスを抱えた学生の思考力と計画スキルの効果的向上が明らかになった (Technology networks, 2021)。

この研究は、ストレスを受けた学生が、4 週間のプ

表 1. セラピードッグを導入した海外の大学 (Pet Smile news for ワンちゃんより参照)

	海外の大学	セラピードッグふれ合いの内容
1	Yale Law School	認定されたセラピードッグが図書館に在籍していて、30分ずつのセッションをしている。
2	University of Connecticut	セラピードッグや猫などのアニマルセラピーを積極的に取り入れている
3	Fordham University	1回のセラピー犬の訪問に200名以上の学生が参加している。
4	Rochester Institute of Technology's	定期的にセラピー犬と触れ合う時間を持ち、金曜日のハッピーアワーにも参加している。
5	Tufts University	学生達のストレスが高まる試験の前後の時に、セラピー犬を呼んで、触れ合いの時を過ごしている。
6	UC Riverside	特別な訓練を受けたセラピードッグが、ストレスを抱えた学生達のストレスリリーフプログラムの一環として提供されている。
7	Caldwell University	セラピードッグを治療プログラムとして提供している。
8	Mercy College	担当するディレクターと一緒に、セラピードッグも出勤します。学生たちはセラピードッグと散歩したり遊んだりしてふれ合っている。
9	Oberlin College	大学専属の治療家が勧める「Puppy Therapy」を利用することができる。セラピードッグを連れてキャンパス内を歩き回ることができる。
10	Occidental College	テスト最終週、20匹のセラピードッグと2時間ほど触れ合っている。

プログラム終了後、最大6週間まで、認知スキルが向上していることを実証した。WSU 人間開発学部准教授の Patricia Pendry によれば「これは、本当に強力な発見で、精神的健康上の問題や学業や学習上の問題の可能性のある学生を支援するために、多くの取り組みが行われた (Patricia, *et al.* 2021)。この研究は、セラピードッグと触れ合う機会を提供することに焦点を当てたプログラムで、このアプローチが学生にとって効果的である」ことを述べている。この研究に参加した学生は309人だった。わずか10分間セラピードッグを撫でただけで生理学的影響があり、学生のストレスが短期的に軽減されたことが示された。ストレスにさらされていた学生は、人間と動物の相互作用の状況下で、実行機能が向上したことが示された。

学生とセラピードッグの交流プログラムは、セラピードッグの温もりを感じながらストレスが緩和することで、苦勞している学生をリラックスさせるのに役立ち、緊張や不安感が軽減し、ストレスフルな状態から回復に向かい、ポジティブな思考から社会性を築くことにも繋がった (Patricia, *et al.* 2021)。

(2) Hounds and Homesickness: The Effects of an Animal-assisted Therapeutic Intervention for First-Year University Students (セラピードッグとホームシック：大学1年生に対する動物介在治療介入の効果)

大学に入学する多くの新生はホームシックを経験している。ホームシックを経験した学生は、ホーム

シックを経験していない学生よりも大学を中退する可能性が高い。キャンパス内で学生とセラピードッグの交流プログラムは、学生の幸福を増進する方法の1つとして人気が高まっている。この研究は、8週間の動物介在療法 (AAT) プログラムで、大学1年生の健康に及ぼす影響を調査した。最初の実現可能性調査 ($n=86$) が実施され、学生が小グループでセラピードッグやボランティアのハンドラーと交流する機会が提供された。

結果は、このプログラムにより、参加者のホームシックのレベルが軽減され、人生への満足度も向上したことが示された。次に、同様の8週間のグループ AAT プログラムを利用して実験研究が実施された。参加者 ($n=44$) は、実験群 (AAT プログラム) または無治療条件 (待機リストの統制群に類似) のいずれかに割り当てた。8週間の終わりに、AAT プログラムの参加者は、治療を受けなかった参加者よりもホームシックが大幅に軽減され、生活への満足度が大幅に向上したことを報告した。プログラムの最初から最後まで、治療群の参加者はホームシックの軽減、生活やキャンパスとのつながりへの満足度の向上を実証したが、治療を受けなかった群の参加者はホームシックが増加し、生活やキャンパスとのつながりへの満足度は変化が見られなかった。実現可能性研究と実験研究の両方の結果は、ホームシックを経験している大学1年生の幸福を増進するための AAT プログラムの使用を裏付けた (John *et al.*, 2016)。

(3) The Effects of Animal-Assisted Activities on College Students Before and After a Final Exam (最終試験前後の大学生に対する動物介在活動の影響)

大学の期末試験は、学生にとって不安とストレスを感じる時期であることがわかっている。この論文には、セラピードッグと触れ合う前後の血圧測定値を使用して、試験の不安に対する動物支援活動(AAA)の効果を調査した。セラピードッグと触れ合う実験群と対照群を比較したところ、期末試験を受ける予定、または受験した学生の血圧低下に関して統計的に有意なことが示された (JoAnn & Gunjan, 2018)。

4. 考察

現代は、実にさまざまなストレスが溢れている「ストレスフル社会」と言われている。そのストレスを軽減する方法の一つとして、動物と触れ合う AAT があり、世界各国ではアニマルセラピーが治療や療法の一種として認識されつつある。

児童精神科医の Levinson (1997) の研究から発展したアニマルセラピーは、現在「Pet Partners」(旧称: Delta Society) が米国内での研究と普及に尽力している。Pet Partners とはアメリカ・ワシントンに本部を持ち、各地に支部を有する大規模団体で、セラピー・アニマルを介して人々の健康を向上させることを目指している。また、全てボランティアによって運営されている「National Capital Therapy Dogs, Inc」は、学校や図書館、各種病院やシェルターなどへ赴き、AAT を提供している。海外の大学キャンパスにおけるセラピードッグの導入の歴史を辿れば、Levinson (1997) による研究の流れから、Pet Partners の大規模団体の発足、AAT を提供しているボランティア団体の National Capital Therapy Dogs, Inc. の発展に繋がっていると思われる。海外では医療機関、福祉機関等のセラピードッグの活動が広まり、大学キャンパスで開催するようになった。海外のキャンパスでは、セラピードッグとのふれ合いが図書館やカウンセリングルーム等で定期的に開催され、セラピードッグが常駐していることも少なくない。また、うつ病や不安障害、PTSD などの精神障害を抱える学生が ESA を必要とする場合、精神科医の診断とアメリカ政府に申請が必要であり、それが認められると、自分のペットを ESA として、また、大学側でも承認されると、キャンパス

に連れて行くことも可能である。ESA はペットであり、家族の一員としてどんな役割をもたらすのだろうか。若島 (2011) によれば、良い変化として (a) 家族のコミュニケーションが増える、(b) ところが癒される、(c) 他者との交流が増える、(d) 明るくなる、(e) 夫婦感を取り持つ、(f) 子どもが相手のことを考えるようになったり責任感をもつようになる。そこで、Levinson (1962) は、動物が人にもたらす効果と影響について、(1) 心理的效果、(2) 生理的・身体的効果、(3) 社会的効果の 3 つをあげている。良い変化として、(b) ところが癒される、(d) 明るくなる、この 2 点が (1) 心理的效果にあてはまる。また、(a) 家族のコミュニケーションが増える、(c) 他者との交流が増える、(e) 夫婦感を取り持つ、(f) 子どもが相手のことを考えるようになったり責任感をもつようになる、この 4 点については、(3) 社会的効果にあてはまる。これらから、ペットは家族の一員のみならず、教育機関においても同じようなことが考えられる。多くの大学生は、大学入学をきっかけに、実家から離れて一人暮らすこと、一緒に過ごしたペットと離れることが多いこと等で、寂しさや不安感からホームシックに悩む学生も多く、大学キャンパス内でのセラピードッグの存在は学生の心の支えになっていることも考えられる。一方、ペットの悪い変化について、若島 (2011) によれば、(a) 家族全員で外出(旅行)できない、(b) 抜け毛、(c) 吠える、臭い、死んでしまうことの不安、しつけができない、ことを指摘している。大学キャンパスで、セラピードッグを導入する際、(b) 抜け毛、(c) 吠える、臭い、死んでしまうことの不安、しつけができない、等の 2 点について、十分配慮しなければならない。そこで、IAHAIO 白書には、AAI における人と動物の福祉のためのガイドラインが記載され、「人の福祉」と「動物の福祉」について、本稿にあげたように、(a) 動物へのアレルギーはないか、(b) 噛みつき、引っかき、吠えの問題はないか、(c) 抜け毛のケア、(d) 感染予防等、上記にあげた、保健衛生について問題ないことを確認することで、安全で安心した環境のなかで、活動することが必要である。他に、セラピードッグの死について触れたい。例えば、犬の寿命は 15~20 年と言われている。ほとんどの場合は確実に犬の方が先に死んでしまい、自分がその最期を看取らなくてはいけない。当たり前のことだが、活動を始める際に、動物の死についてよく理解することが大切である。例え

ば、動物園の飼育係は愛情を抱きながらも一定の距離をおいて動物と付き合っているため、死別を経験してもペットロスにはならないという (HelC, 2003)。くれぐれも過剰にセラピードッグにのめり込むことのないよう注意したい。これらのことを踏まえて、本学は2017年より、多くの学生が学生相談室を利用しやすくなることを目的として、月1回、昼休みに「セラピードッグとのふれ合い」企画を定期的で開催し、多くの学生や教職員の安らぎ場になっている (卜部他, 2023)。

海外の大学キャンパスにおけるセラピードッグの研究と効果で述べた通り、セラピードッグを撫でると生理学的影響があり、学生のストレスが短期的に軽減された研究、ホームシックが大幅に軽減し、休退学の歯止めにつながった研究、試験前にセラピードッグとふれ合い後、安心することができた研究を紹介した。一方、国内の大学キャンパスにおけるセラピードッグの研究について「大型犬との短時間のふれあいがもたらす心理的効果の実験的検討」(漆原他, 2023)があり、漆原によれば「限られた回数、短い時間のふれあいであっても、動物たちは私たちに、たとえそれがささやかなものに思えたとしても、確実なギフトをもたらしてくれることが示された」ことを述べている。

これらのことから、アメリカの大学では、セラピードッグの導入が幅広く浸透していることが解った。多方面への効果が期待できる AAT であるが、欧米では広く活用され、医療行為の一環となっているものの、日本では社会的認知度も含めて十分ではない。そのため、国内の大学キャンパスのセラピードッグの導入も少ない。大学には学生相談室があり、利用者は、増えてきているものの、学業や対人関係で悩み、誰にも相談できずに、長期欠席している学生が少なくない。そこで、セラピードッグのふれ合いを開催することで、学生相談室を利用しやすくなるようなきっかけになればと思われる。大学キャンパスのセラピードッグ導入の効果となる科学的な裏づけが乏しいなど、まだまだ多くの問題点が存在するのが実情である。私たち人間は、セラピードッグと触れ合うことでどのような効果が期待できるのか、その可能性について、今後も研究をすすめていきたい。

参考文献

[1] AIRPORT ANIMAL POLICY.
<https://www.flypgd.com/wpcontent/uploads/2023/>

04/FLYPGDLogo-Charlotte-County-Airport-Authority-CMYK.svg, (2024年1月15日閲覧)。

- [2] Concordia University Wisconsin (2019). Concordia's Comfort Dog Zoey featured in new book about working dogs, <https://blog.cuw.edu/concordias-comfort-dog-zoey-featured-in-new-book-about-working-dogs/>, (2024年1月12日閲覧)。
- [3] High Efficiency Image File Format (HelC) (2003). 動物と一緒に生きるということ, アニマルセラピーの利点と注意点. https://www.health.ne.jp/library/detail?slug=hcl_5000_w5000332&doorSlug=infection (2024年1月12日閲覧)。
- [4] HEMHA (Higher Education Mental Health Alliance) (2023). Animals On Campus: Current Issues and Trends A HEMHA Guide, <https://hemha.org/animals-on-campus-guid>, (2024年1月12日閲覧)。
- [5] IAHAIO (International Association of Human-Animal Interaction Organizations). IAHAIO 白書 (日本語版), <https://www.jaha.or.jp/media/IAHAIOWHITEPAPER.pdf>, (2024年1月12日閲覧)。
- [6] IAHAIO (International Association of Human-Animal Interaction Organizations), <https://iahaio.org/>, (2024年1月10日閲覧)。
- [7] JoAnn Jarolmen and Gunjan Patel (2018). The Effects of Animal-Assisted Activities on College Students Before and After a Final Exam, *Journal of Creativity in Mental Health*, Vol.13-3, 264-274.
- [8] John-Tyler and Holli-Anne Passmore (2016). Hounds and Homesickness: The Effects of an Animal-assisted Therapeutic Intervention for First-Year University Students, *A multidisciplinary journal of the interactions between people and other animals*, Vol.29-3, 441-454.
- [9] Levinson, B. M. (1962). The dog as a "co-therapist" *Mental Hygiene*, Vol.179, 46-59.
- [10] Levinson, B. M. (1997). *Pet-Oriented Child Psychotherapy*, revised and updated by Mallon, G. P., 2nd eds., Charles, C. Thomas Publisher, <https://www.mys1cloud.com/cct/ebooks/9780398066741.pdf>, (川原隆造訳 (2002). *子どものためのアニマルセラピー*, 日本評論社)。
- [11] National Capital Therapy Dogs, Inc, <https://www.nctdinc.org/>. (2024年1月11日閲覧)。
- [12] Patricia Pendry and Jaymie Lynne Vandagriff (2019). View all authors and affiliations, Animal Visitation Program (AVP) Reduces Cortisol Levels of University Students: A Randomized Controlled Trial All Articles, <https://doi.org/10.1177/2332858419852592>, (2024年1月10日閲覧)。
- [13] Patricia Pendry, Alexa Carr, Jaymie L. Vandagriff, and Nancy Gee, (2021). Human Animal Interaction into Academic Stress Management Programs: Effects on Typical and At-Risk College Students' Executive Function. <https://news.wsu.edu/press-release/2021/05/12/petting-therapy-dogs-enhances-thinking-skills-stres>

- sed-college-students/, (2024年1月10日閲覧).
- [14] Pet Partners, <https://petpartners.org/>, (2024年1月10日閲覧).
- [15] Pet Smile news for ワンちゃん, <https://psnews.jp/dog/p/26328/>, (2024年1月10日閲覧).
- [16] Technology networks (2021). Petting Therapy Dogs Boosts Stressed Students' Thinking Skills, Neuroscience News Research, <https://www.technologynetworks.com/neuroscience/news/petting-therapy-dogs-boosts-stress-students-thinking-skills-348752>. (2024年1月12日閲覧).
- [17] 特定非営利活動法人 動物介在教育・療学会, ASAET (Asian Society for Animal-assisted Education and Therapy), ASAET について (ASAET とは, 動物介在教育と動物介在療法について). <https://asaet.org/about/>, (2024年1月10日閲覧).
- [18] USA TODAY, The latest and greatest college luxury: Loaner puppies, <https://www.usatoday.com/story/college/2014/06/27/the-latest-and-greatest-college-luxury-loaner-puppies/37392281/>, (2024年1月10日閲覧).
- [19] 卜部洋子・辻 由依・斉藤美香・坂口勝幸 (2023). 学生相談室におけるセラピードッグの取り組み—心をつなげるセラピードッグのふれ合い—, 札幌学院大学総合研究所紀要, Vol.10, 69-77.
- [20] 漆原宏次・古野良祐・皆川春咲・播磨谷莉穂 (2023). 大型犬を用いた短時間の動物介在活動により得られる心理的効果の実験的検討—心理尺度と潜在連合テスト (IAT) を用いて—, 近畿大学総合社会学部紀要, Vol.11-2, 1-13.
- [21] Virginia Tech (2019). VIRGINIA TECH NEWS, Moose, therapy dog and 'true animal hero', https://news.vt.edu/articles/2019/03/unirel_moose.html, (2024年1月10日閲覧).
- [22] 若島孔文 (2011). 家族関係に及ぼす犬の影響について, 心理学ワールド, 小特集, 動物との触れ合いと私たちの心と生活, Vol.55, 23-24.
- [23] Washington State University (2021). Petting therapy dogs enhances thinking skills of stressed students, <https://news.wsu.edu/press-release/2021/05/12/petting-therapy-dogs-enhances-thinking-skills-stressed-college-students/%EF%BC%89/>, (2024年1月10日閲覧).
- [24] Yale News, Yale's therapy-dog program spreads (2015). <https://yaledailynews.com/blog/2015/12/09/yales-therapy-dog-program-spreads/>, (2024年1月12日閲覧).
- [24] 八城 薫 (2020). 職場におけるイヌ (セラピー犬) 介在の社会的・心理的効果の検証. 大妻人間生活文化研究, International Journal of Humanities and Cultural Studies, Vol.30, 349-352.
- [25] 横山章光 (2011). 「アニマルセラピー」は本当に可能なのか?, 小特集 動物との触れ合いと私たちの心と生活, 心理学ワールド, Vol.55, 27-28.

Current Status of Therapy Dog Introduction to Overseas University Campuses: Future Possibilities

Yoko URABE¹

Abstract

The term “therapy dog” appears to have taken root in Japan. Several organizations have visited university campuses with trained pets in recent years, providing opportunities for students and faculty members to interact with the animals. Our university has also been holding regular programs to interact with therapy dogs since 2017. Many overseas university campuses have been using therapy dogs more actively than in Japan, with an increasing number of schools introducing therapy dogs to campuses to alleviate stress among students before examinations and other stressful events. Moreover, therapy dogs are sometimes stationed in overseas university libraries and counseling rooms. Research has shown that students can enjoy various beneficial effects by interacting and spending time together in the same space with therapy dogs, such as relieving anxiety and tension and bringing out peace and motivation. This article introduces activities and studies to understand therapy dogs in overseas university campuses and discusses the possibility of introducing therapy dogs to Japanese university campuses in the future.

Keywords: Therapy Dogs, Students, Mental Health.

¹Student Counseling Office, Sapporo Gakuin University, urabe@ims.sgu.ac.jp.